

# 若葉台中学校・若葉台小学校ブロック※1 「学力の向上」「自己有用感・自己肯定感の向上」※2を目指して

## 1 「授業改善」に向けた教職員の取組

若葉台中学校、若葉台小学校（以下「若葉台中学校ブロック」と呼ぶ）では、小学校、中学校の教職員が集まり「授業」について話し合っています。主に9月に行われる研究授業に向け、今、子どもたちの学力はどうか、基礎・基本を身に付けさせるにはどうしたらよいかを考え、授業実践をしています。授業後、小学校、中学校の教職員の目で見えて感じたことを伝え合い、教員自身の授業の改善に役立てています。また、中学校では授業改善週間を設け教員同士で授業を見合っています。小学校では課題解決に進んで取り組む姿を目指した指導のあり方を探りながら研究を進めています。



教科ごとにわかれ、小中の教職員が意見交換をしました。

## 2 夏季休業・放課後の「学習会」の実施



中学校では夏季休業中に学習会をしています。参加希望制の学習会に、今年度はのべ150人の生徒が参加しました。全学年の生徒がEホールに集まり、夏休みの宿題やわからなかった問題を教員に質問します。また、教員のほかに2名の卒業生（高校生）も学習ボランティアとして参加しました。

小学校では後期から月に2回、放課後に集中して学習会（補習）を実施しています。児童が「わかってきた」「できるようになってきた」「うれしい」という思いをもてるようにすることを目的としています。そして「自分も結構できるようになってきたな」という自己肯定感をもてることをねらって取り組んでいます。

卒業生（高校生）に質問をする中学1年生です。気軽に聞きやすく、質問に答えるだけでなく、高校生活や受験についても話していました。

## 3 「自己有用感・自己肯定感の向上」を意識した教育活動の取組

学力の向上と同じように、「自己有用感・自己肯定感の向上」に取り組んでいます。自分は信頼される存在だと感じられることは、義務教育終了後、一人の市民として生き抜く源だと考えます。体育祭・運動会、合唱コンクール小中合同学年リハーサル等、様々な行事の中で児童生徒による体験活動を通し自己有用感・自己肯定感を養っています。また、小中合同学校保健委員会では「心の健康」をテーマに、小学6年生～中学3年生までが一同に集まり、外部からの講師を招き、ワークショップを取り入れ相手と自分を大切に思う気持ちを育てています。



合唱リハーサルでは、児童生徒が互いに合唱を聞き合いました。

## 4 保護者、地域の協力と、「学校運営協議会」の設置

子どもたちの成長は学校だけでは達成できません。保護者、地域、教職員の子どもたちに対する願いや思いが同じ方向になったとき、大きな力となって成長を促すと考えています。若葉台中学校ブロックでは、「学校運営協議会」を設置し、その願いや思いが一致しているかどうかを定期的に検討しています。地域代表、保護者代表の皆様、学識経験者、学校代表者による組織で、そこで話し合われた内容は、小学校、中学校ともに教育活動に活かしています。

若葉台中学校ブロックは「学力の向上」「自己有用感・自己肯定感の向上」をこれからも真正面から考えていきます。

※1 横浜市教育委員会は「横浜教育ビジョン」で示した“横浜の子ども”の姿の実現に向け「横浜版学習指導要領」を策定し、義務教育9年間の連続性のある教育活動を目指しています。「横浜版学習指導要領 総則編」には「小中学校の教職員が様々な教育観の共有化をすることにより、授業改善と学力向上、児童生徒指導の一層の充実につなげていく」とあり、中学校区を基本に、中学校とその学区に位置する複数小学校または1校の小学校で「小中一貫教育推進ブロック」を設置し、小中学校間の連携、協働及び接続の推進を図ることを施策として実施しています。若葉台小学校と若葉台中学校は1つのブロック（1小学校1中学校）になっています。なお、上川井小学校は都岡中学校とブロックになっています。

※2 「自己有用感」とは「他者から感謝された・認められたという体験を通して、集団の一員としての役割を果たせたという誇りや自信を感じられること」（国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター 滝充 総括研究官）です。「自己肯定感」については「自分が自分であって大丈夫」（立命館大学 高垣忠一郎 教授）という自己評価です。「子どもや若者のなかから『自分が自分であって大丈夫』という安心感が失われ、自分を責め、貶し、否定し、嫌う自己否定の心にとらわれる子どもや若者の姿が現れている」と言っています。